【特別記事】

キーワードで読み解く 英語教育のいま

編集部

「英語教育の在り方に関する有識者会議」が2014年９月に報告した「**今後の英語教育の改善・充実方策について　報告～グローバル化に対応した英語教育改革の５つの提言**」（以下，「５つの提言」）では，「グローバル化の進展の中で，国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては，その基礎的・基本的な知識・技能と，それらを活用して**主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成**は重要な課題」として，小学校での英語教科化を含む**学習指導要領の改訂**や，**外部検定試験の活用**を視野に入れた**入試改革**，ICT の活用，大学教職課程の改善を含めた指導体制の充実について提案している。

こうした，海外で通用するグローバル人材の育成に関する政策が，2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて次々と示されている今，高校現場で押さえておきたいトピックを，気になるキーワードをもとに紹介する。

＊

【新学習指導要領】

2016年度に中教審の答申をまとめ，一部先行実施しながら2020年度からの本格実施を目指す新学習指導要領について，「５つの提言」では，小・中・高の学びを円滑に接続させ，「英語を使って何ができるようになるか」という観点から「聞く・話す・読む・書く」４技能の具体的指標を含む一貫した教育目標を示すことが提案されている。

また，中央教育審議会総会の下村文科相の諮問（2014年11月）では，教育内容の見直しに加えて，**指導や評価の方法**についても指導要領に盛り込むことや，「より高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための新たな教科・科目」についての検討を求めるほか，「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視した，課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（「**アクティブ・ラーニング**」）の必要性にも触れている。

特に英語教育については，「グローバル化する社会の中で，言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう，外国語で躊躇せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力」を育む必要があるとして，**小学校３年生から外国語活動を開始**し，**５年生から**「聞く・話す」に加え，「読む・書く」の態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うことを目標として**英語を教科として行う**こと（2018年度より段階的に先行実施の予定），**中学校では英語で授業を行う**ことを基本とすること，**高校では幅広い話題について発表・討論・交渉などを行う能力を高める**ことを求めた。

【アクティブ・ラーニング】

上記の学習指導要領の改訂方針でも掲げられている「アクティブ・ラーニング」は，課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶことで，知識・技能の定着や活用，また学習意欲の向上も図ることができる学習方法である。

中央教育審議会（2012年８月28日）の報告書では「生涯にわたって学び続ける力，主体的に考える力を持った人材は，学生からみて受動的な教育の場では育成することができない」とし，従来のような教員による一方向的な講義形式の知識の伝達・注入を中心とした授業から，教員と学生が意

思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り，学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学習への転換を求めている。

具体的には，発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習のほか，教室内でのグループ・ディスカッション，ディベート，グループ・ワーク等，**双方向の講義や演習，実験，実習，実技を中心とした授業**が想定されている。

【大学入試改革】

中教審高大接続特別部会が答申案としてまとめた大学入試改革案では，まず現在の大学入試センター試験を廃止し，２つのテストを新設することを提言している。

１つは，知識の活用力や課題解決力を測る「**大学入学希望者学力評価テスト**（仮称）」で，2020年度からの導入を目指す。高校在学中に受験機会を複数回設定することで，一発合格で入学者を決めず，受験生の能力や適性を多面的に評価する。１点刻みの評価はせず段階別に成績を出す。また，教科別の試験形態をやめて，複数の教科を合わせた「複合型・合科目型」の問題とし，知識・技能の総合的な活用力や思考力を見るとしている。

もう１つは，高校在学時の基礎学力の定着度を測る「**高等学校基礎学力テスト**（仮称）」で，2019年度からの実施を目指す。国数英理社の必修科目の内容について高校２，３年生を対象に，在学中に複数回受験できるようにする。

新テストの内容は専門家会議を設けて検討し，2015年中に結果をとりまとめ，それを踏まえて，**2016年中にはモデル問題を公表**し，2017年度初頭には出題内容や実施までのスケジュールを示す実施方針をとりまとめる予定である。

【外部資格・検定試験の活用】

上記で紹介した大学入試改革の一環として，英語については，現在の入試は「読む」「聞く」に偏るものが多く，そのありかたが生徒の学ぶ意欲や教員の指導に大きく影響を与えているとし，「話す・聞く・書く・読む」の４能力を適切にバランスよく測るため，**大学入試や卒業認定における英検やTOEFL，GTEC等の外部資格・検定試験の活用**も推進し，今後協議会を設けてその指針を作るとしている。また，**高校卒業段階での到達目標として英検２～準１級，TOEFL iBT60点前後以上等**を設定することも検討されている。

【グローバル人材を育成するSGH / IB / SGU】

社会課題に対する関心と深い教養，コミュニケーション能力，問題解決力等の国際的素養を身に付け，将来，国際的に活躍できるグローバル・リーダーを育成する教育課程等の研究開発を行う高等学校及び中高一貫教育校として認定される「**スーパーグローバルハイスクール**」（SGH）は，2014年度は56校のところ，2015年度はさらに追加し100校規模へ増やすことを目標とする。

国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与えるプログラムを実施している「**国際バカロレア**」（IB）は，国内の認定校は2015年現在では28校だが，2018年までに200校まで拡大することを目標としている。

また，大学のグローバル化に関しては，世界の大学ランキングトップ100に10校以上ランクインさせるなど大学の国際競争力を高めるため，世界トップレベルの教育・研究を目指す「**スーパーグローバル大学**」（SGU）に選定されたのが37校（応募104校）で，そのうち世界大学ランキングで上位を目指す「トップ型」には東大など13校，国内のグローバル化を推進する「グローバル化けん引型」に上智大学など24校。

なお，大学については「**大学教育再生加速プログラム**」（AP）に取り組む大学への支援もなされており，アクティブ・ラーニングや学修成果の可視化，入試改革・高大接続をテーマとする46件（47校）が選定されている。